

ふんどし人力車夫編

高坂猛は他四名の男たちとともに全裸で立っていた。

他四名の男たちは日に焼けた肌をしているのに対し、猛は色白の肌をしているのが目立つ。

しかし、体格については、猛は他の男たちと遜色はない。

色白の肌は虚弱さではなく筋肉質の肉体と相まって西洋彫刻のような魅力を漂わせているのだ。

そして、他四名と隔絶しているのは肌の色だけではない。

他四名は大人の男らしく、チン毛が生えているのに対し、猛の下腹部はつるつるのパイパンだ。

また、他四名のチンポは剥け方に差異はあれど皮を被った仮性包茎であるのに対し、猛は必ず剥けだ。

猛のチンポは常人よりも太く長く、ピンク色の亀頭は雁首が目立ち、性の矢印のようだ。

金玉も精力の強さを示すかのような大きさをしており、この場がチンポ品評会だったのならば、猛がダントツで優勝しただろう。

けれど、ここはチンポ品評会の場ではない。

人力車夫の営業所なのだ。

それもただの人力車夫ではない。

ふんどし一丁で肉体美を誇示しながら走るふんどし人力車夫なのだ。

「やあ、今日も一日よろしく頼むよ」

「よろしくお願ひします！」

営業所に入ってきた営業所長の黒柳に、猛たちは挨拶をした。

黒柳は猛が所属する丈翼大学剣道部のOBの友人だ。

ふんどし人力車夫の人員が足りないということを相談していた黒柳を助けるために、OBが猛をふんどし人力車夫に紹介をしたのだ。

体育会系である猛にとって、OBの面子を潰すことはありえないことだ。

だから、猛はしばらくの間、ふんどし人力車夫のアルバイトをすることになったのだ。

「それでは皆、始業前の動作確認を行うよ」

黒柳が棚の鍵を開け、リングを五つ取り出した。

「安西くん」

「はい！」

名前を呼ばれた安西が返事をする、黒柳が安西のチンポの根元にリングを通し、電子キーでロックをかけた。

安西のチンポにかけられたリングは射精防止リングだ。

射精防止リングが放つ特殊なパルスにより、装着者はいかなる刺激・愛撫を受けても射精できなくなるのだ。

黒柳は残り三名の名を呼び、射精防止リングを装着させる。

「高坂くん」

「はい！」

黒柳に名を呼ばれ、猛は返事をした。

黒柳は猛のペットボトル早漏チンポにも射精防止リングを装着させ、電子キーでロックをかけた。

これで、ふんどし人力車夫である猛たち五名は勤務時間が終わるまで射精を禁じられたというわけだ。

「では、動作確認に入る。

一同、シコりなさい」

「はい！」

黒柳の号令を受けて、猛たちはチンポを扱き始めた。

射精防止リングが故障していないかを確認するために、毎朝、営業前にチンポを扱くのがふんどし人力車夫の務めなのだ。

この場には男しかいないため、猛もさほど恥ずかしさを覚えずにペットボトル早漏チンポを扱く。

猛の手の中でペットボトル早漏チンポがむくむくと勃起し始めた。

平常時でさえ常人より太く長い陰茎が更に膨れ上がり、太く長く逞しくなる。

しばらくして、猛の手の中でペットボトル早漏チンポがその威容を発揮した。

勃起時 23.7cm の猛のチンポはペットボトルと比較しても遜色がないだろう。

ピンク色の亀頭は大きく膨れ、上反りの陰茎は立派な雰囲気漂わせている。

そして、他四名のふんどし人力車夫のチンポが、猥雑感を漂わせる男性器であるのに対し、猛のペットボトル早漏チンポは勃起してもなお、清潔感を漂わせているイケメンチンポであった。

顔も身体も、チンポさえもイケメンである猛の雄としての欠点といえば、極度の早漏であることだけだ。

しかし、その秘密はこの場では明らかにされることはない。

ふんどし人力車夫は勤務中の射精はご法度だ。

だからこそ、ふんどし人力車夫は射精防止リングを装着し、射精防止リングの動作確認のために営業開始前にシコるのだ。

極度の早漏である猛は、普通ならばシコれば一分もしないうちに射精してしまう。

けれど、射精防止リングの効果で射精は禁じられている。

「ああっ……ふう……」

だから、喘ぎ声は出ても、鈴口から溢れるのは我慢汁だけなのだ。

濡れやすい性質である猛は我慢汁が豊富だ。

だから、溢れ出た我慢汁が猛のペットボトル早漏チンポを濡らしていく。

淫猥な艶を帯びて、ようやく猛のチンポも男性器であるということを周囲の人間に示す。

他の四名も喘ぎながらチンポを扱っている。

猛と同様に我慢汁こそ出ても、射精の気配はない。

「よし。動作確認完了」

「はい！」

黒柳の号令を受けて、猛たちはシコる手を離れた。

平常時でさえ他四名とは隔絶したチンポを誇っていた猛ではあるが、勃起するとその格

差は無慈悲なほどであった。

猛のペットボトル早漏チンポの前では、平凡なチンポは短小に見えてしまうのだから。

「では、チンポを萎えさせるぞ」

黒柳の言葉に猛は握り拳を作った。

猛は、射精防止リングの動作確認のあとのこれが苦手なのだ。

自然に萎えるのを待つのではなく、黒柳が手にした冷感スプレーでチンポを萎えさせるからだ。

冷感スプレーで強引に冷やされ、萎えさせられる感覚に、猛はどうしても慣れることはできない。

けれど、これも仕事なのだ。

それもOBの紹介によるものだ。

だから、OBの面子を潰さないためにも耐えるしかないのだ。

安西他四名の男たちも、冷感スプレーの噴射は嫌なことのようで、顔をしかめている。

けれど、黒柳は一人一人の勃起チンポに流れ作業で冷感スプレーをかけていく。

そして、猛の番が来た。

「では萎えさせるぞ」

「お願いします」

猛は歯を食いしばり、握り拳に力を入れた。

シュワアアアアア！

「ぐううううううう！」

敏感な亀頭に氷の棘が幾千幾万と刺されるような感覚に猛は呻いた。

好き好んで亀頭に浴びたい感覚ではない。

痺れと冷たさで猛のチンポが徐々に萎えていく。

「では、各自、禪を着用の上、出勤だ」

「はい！」

黒柳の号令に返事をすると、猛はロッカーから自身の赤禪を取り出し、締め始めた。

「いやあ、絶景かな絶景かな」

人力車に乗車した男性客が嬉しそうな声を上げていることに猛は満足感を抱いた。

猛は今、川辺の桜並木を人力車で走っている。

この桜並木は観光名所であるため、通り過ぎる観光客や散策する地元住民らが赤禪一丁で人力車を走らせる猛に目を奪われる。

無理もないことだ。

猛の顔はイケメン、身体は西洋彫刻のような魅力を放っている。

普通に服を着て普通に街を歩いているだけで衆目を引くのが猛なのだ。

その猛が今、赤禪という和の魂一丁で人力車を走らせているのだ。

西洋彫刻のような肉体美に赤禪という和の魂。

流れの違う文化の粹をその身で見事に融合させた伊達男が今の猛なのだ。

禪一丁という姿を除いても、人目を引くのは当然のことなのだ。

猛が人力車を走らせる度、剣道で鍛え上げられた肉体が躍動する。

赤禪一丁という姿のため、猛の肉体美は余すところなく衆目に開かれている。

腕の筋肉の張り、胸板の逞しさ、腹筋の堅牢さ、雄肉が充溢した尻の密度に、それらを支える両足の筋肉の見事さ。

そして、ペットボトル早漏チンポを収めた赤禪のずっしりとしたもっこり。

男という生き物の美を余すところなく表しているのが猛なのだ。

猛は臨時のアルバイトながら、ふんどし人力車夫の間であつという間に一番人気になった。

見目もさることながら、人力車夫として人力車を揺らさずに走らせることができる屈強な体躯、そして誠実な人柄と相まって連日指名が届くようになったのだ。

黒柳にはこのまま正社員になってもらえないだろうか、とそれとなく匂わされているが、剣道で身を立てたいと考え、努力している猛にとっては過分な期待である。

だからせめて、アルバイト期間は誠実に勤めようと猛は考えているのだが、そうした真摯な姿勢とふんどし人力車夫の先輩たちに学ぶ熱心さこそが、人気に火を点けているのだと猛は気がついていない。

「高坂くん、暑くなってきたのでちょっと冷たいものを食べてきていいかな」

男性客が桜並木に並ぶ露天を指差して、猛に声をかけてきた。

「分かりました。

ここでお待ちしております」

猛は人力車を止め、男性客が降りる踏み台を用意した。

「ありがとう、高坂くん」

男性客が猛に礼を言うと、そのまま近くの露天まで歩いていった。

その背中を見送りながら、猛は額に流れる汗を手で拭った。

春の穏やかな気候ではあるものの、人力車にお客を乗せて走ると剣道で鍛えられている猛といえども汗をかく。

色白の肌は灰かに火照り、猛が彫刻ではなく血の通った人間であることを示している。

首筋を流れる汗が鎖骨に溜まり、鎖骨から零れた汗が胸板の曲線を滑るように落ちていく。

猛は人力車に括り付けてある荷物入れからタオルを取り出し、顔を拭いた。

今の男性客も、猛を指名してくれたお客様だ。

人力車を押しながら聞いた話によると、ふんどし人力車に乗るために新幹線を使ってやってきたのだという。

ありがたい話だ。

今後もふんどし人力車を愛好してもらえるように、丁寧なおもてなしをしなければならないと猛は決意を新たにする。

男性客がソフトクリームを二つ持って戻ってきた。

「高坂くん、暑いだろうし、一つどうぞ」

男性客にソフトクリームを差し出され、猛は困った。

黒柳から、運行料金以外、どんな理由があっても乗客から受け取ってはならないと注意されていたからだ。

「申し訳ありません。

サービス規定により、運行料金以外のものをお客様から頂くわけにはまいりません」

だから猛が謝罪をすると、男性客が困った顔をした。

「それはすまないことをしたね。

でも困ったな、流石にソフトクリーム二個は一人で食べるには多すぎるな」

男性客が持ったソフトクリームは小さく、運動部所属である猛ならば二個でも三個でも食べられそうな大きさに見える。

けれど、運動部の食事を一般人に当てはめるのは間違いだろう、と猛は心の中で首を振った。

「うーん、返す訳にもいかないしなあ」

男性客が困った顔をしている。

男性客の手に保持されているソフトクリームの先端が春の陽気に負けて曲がり始めている。

このまま放置をしていたら溶けてしまいそうだ。

「うーん、高坂くん、僕を助けると思って一つ食べてくれないかな」

男性客が猛を上目遣いに見る。

このままでは、ソフトクリームが一つ駄目になってしまうし、そうすれば男性客も不快な思いをするだろう。

……仕方がないか。

「分かりました。

ありがたく頂戴いたします」

「ああ、よかった」

猛は男性客が差し出したソフトクリームを受け取り、口に運んだ。

バニラアイスの冷たさと甘さが人力車を走らせてきた猛の身体に心地よく染み入る。

猛はそのままソフトクリームのコーンまで食べると、タオルを取り出し、手を拭いた。

「どうもありがとう」

ソフトクリームを差し出した側だというのに、男性客が猛にお礼を述べた。

「いえ、こちらこそご馳走様でした」

猛は男性客に頭を下げた。

そして、男性客は猛が用意した踏み台に乗って人力車に乗車した。

「では、残りの観光ルートをよろしく願いますよ」

「かしこまりました」

猛は顔き、人力車を走らせ始めた。

しばらく人力車を走らせていると、猛は身体に違和感を覚えた。

肌がなんだかむずむずして下腹部に熱が溜まっていく感じがするのだ。

猛の全身に汗が浮き出し、猛の健康美に艶を添え始める。

「どうしたんだい、猛くん？」

男性客が馴れ馴れしい口調で猛に問いかける。

「いえ、大丈夫です」

猛は急に距離を詰めてきた男性客に戸惑いながら人力車を走らせる。

猛は己の身体に起き始めた異変を気のせいだと考え、人力車を安定して走らせることに集中する。

けれど、その猛の決意を下腹部の熱がじくじくと邪魔をし始めた。

人力車を支える猛の掌にも汗が滲み、猛は口から火照った甘い息を吐き始める。

猛の下腹部では異変が進んでいた。

赤禪のずっしりとしたもっこりが変化をし始めたのだ。

もっこりが徐々に上向きに鋭角に変化し始めたのだ。

性教育を受けた者ならば誰もが知る男性生理現象、勃起だ。

猛は人力車を走らせながらペットボトル早漏チンポを勃起させ始めたのだ。

猛のチンポは常人のチンポに比べて大きく、太々しい。

萎えていても赤禪のもっこりによってその存在を主張するほどなのだが、それが勃起をし、ペットボトル早漏チンポと揶揄される姿を露わにしようとするれば、否応なく目立ってしまう。

猛はぞっとした。

猛には人並みの常識と羞恥心が備わっている。

街中で勃起を晒しながら歩くことは倫理的に問題があるし、猛の羞恥心にとっても大きな負担だ。

勃起するな勃起するなと祈りながら足を進めても、意識すればするほど猛のペットボトル早漏チンポは海綿体を膨張させ、その本性を發揮しようとする。

赤禪一丁の猛の姿は和と洋の調和した魅力を放っていた。

だが、その赤禪が勃起によってもっこりの形を変えると事情が異なる。

猛はイケメンであればあるほど、街中で勃起を晒しながら歩いているという卑猥な事実が強調されてしまうのだ。

通り過ぎる人々も、猛の赤禪のもっこりにぎょっとした顔をする。

無理もない。

今の猛の赤禪のもっこりはペットボトルでも隠しているのではないかと子どもが邪推するほどに大きく膨れているのだから。

勿論、性教育を受けている年齢以上の者ならば、そのもっこりの意味を知るところだ。

こんな恥ずかしい姿で街中を走るわけにはいかない。

猛は焦りながら必死に考えた。

どうにか勃起を鎮める方法はないかと考えた。

最初に思い浮かんだのがオナニーによる射精だ。

流石に射精をすればはしたくないペットボトル早漏チンポも萎えるだろう。

だが、この案は使えない。

今の猛は、いや、ふんどし人力車夫たちは射精防止リングをはめられている。

だから、ちょっとトイレに寄って又くという手段は使えないのだ。

次に思いついたのが玉責めだ。

自分で自分の金玉を責めるのは気分の良い行為ではないが、勃起もっこりを晒しながら

歩くのに比べたらはるかにマシだろう。

けれど、この案にも問題がある。

今の猛は勤務中だ。

人力車にお客様を乗せている。

そんな中、人力車から離れることは望ましいことではないからだ。

そんな逡巡をしている間にも猛のペットボトル早漏チンポが勃起を完了しようとする。

とうとう、猛のペットボトル早漏チンポが完全に勃起をした。

赤禪のもっこりを下にずむしっと溜まった形から鋭角に天を突く形へと変貌している。

隠しようのない勃起が猛の赤禪に露わになったのだ。

当然、道行く人々も真昼間の屋外でチンポを勃起させて人力車を引いている猛を凝視する。

当然だろう。

ただでさえ人目を惹くイケメンが赤禪一丁で、しかも勃起しているのだ。

見るな、という方に無理がある。

道行く人々は、ある者は顔を赤らめて慌てて目を逸らし、ある者は珍獣を見るかのように凝視し、またある者は侮蔑の眼差しを向ける。

そんな様々な目線に猛の羞恥心は強く刺激され、猛は顔が赤くなる。

どうして勃起しちまうんだよ……

こんなじゃ俺、変態そのものじゃないか……

真昼間の往来でチンポギンギンにさせていて、赤禪を突き上げて……

あああ、恥ずかしい……

穴があったら今すぐ入りたい……

あああ……俺のチンポ、無駄にでかいから目立って仕方がない……

こんなじゃ、誰もかれもが俺を変態だと思うじゃないか……

見ないでくれ……見ないでくれ……

こんなところを見ないでくれ……

俺の勃起もっこりを見ないでくれ……

猛は歯を食いしばり、羞恥心を震わせ、人力車を走らせながら金玉を責めてペットボトル早漏チンポを強引に萎えさせるのに都合の良い場所を探す。

ペットボトル早漏チンポを勃起させている時点で十分変態なのに、自分で自分の金玉を責めるところを往来の人々に見せるのは猛の常識と羞恥心では無理があるのだ。

だが、間が悪いことに、このあたりにはトイレなどの都合の良い場所が見当たらない。

「猛くん、済まないんだけどね」

男性客が猛に声をかけてきた。

「なんでしょうか？」

猛は足を止め、振り返って男性客に問いかけた。

「その、車酔いをしたみたいなんだ。

だから、速度を下げてください歩いてくれるかな」

「も、申し訳ありません」

猛は男性客の方を向いて頭を下げた。

己のはしたない勃起チンポに気を取られて丁寧なおもてなしを忘れていたことに、猛は恥ずかしさを覚える。

今の猛はふんどし人力車夫の一員なのだ。

アルバイトということは言い訳にはならない。

ふんどし人力車夫の一員として、お客様に丁寧なおもてなしをしなければならないのだ。

「おや、猛くん。

赤禪の中に何を隠しているんだい？」

男性客が猛に問いかけた。

猛が男性客に振り返ったことで、これまで男性客から見えなかった赤禪のフル勃起もっこりが見えてしまったのだ。

「な、何も隠していません」

猛は引きつった笑みを浮かべて首を振った。

「声が上ずっているね。

喉が渴いたのなら、そこに隠したペットボトルを飲めばいいんじゃないかな？」

男性客が笑みを浮かべて、猛の赤禪のフル勃起もっこりを指差す。

猛の笑みが強張る。

猛にも羞恥心がある。

例えば、ふんどし人力車夫の出勤前の全裸待機も恥ずかしくないわけではない。

けれど、全裸待機は勤務上必要なことである上にその場にいるのは男性のみであり、部外者の目はなかった。

だから、恥ずかしいけれど許容することができた。

一方、男性客からの問いかけは猛の羞恥心にとって大きな負荷であった。

男性同士ではあるのだが、今日会ったばかりの他人であり、そして、この場には男性客以外にも往来する通行人の耳目がある。

この状況で、「チンポが勃起しています」と発言をすることは、猛の羞恥心にとって試練でしかないのだ。

「どうしたんだい、猛くん？」

喉が渴いたのなら赤禪にしまったペットボトルを飲めばいいじゃないか」

男性客がにやにやと笑いながら猛を追い詰めていく。

「いえ、これはペットボトルではありません」

猛は英語の例文のような返答をするしかなかった。

「へえ」

男性客が笑みを深める。

「ペットボトルじゃないのなら、何だい？」

お客様を運んでいるときに、そんなところに不審物をしまっていたら駄目だよな」

「いえ、不審物ではありません」

猛は羞恥に顔を真っ赤に染めながら返答する。

「じゃあ、何が収まっているのかな？」

男性客が猛に問いかけた。

ここは観光客や地元住民が多く往来している通りだ。

そんなところでチンポを勃起させていると口にするのは、猛の常識と羞恥心にとって大きな負担であった。

「お客様の質問に答えるのが、おもてなし、じゃないのかな」

男性客は猛が内心、羞恥に悶えていることを察しているかのように猛を追い詰めていく。

「……俺のチンポです」

猛は小さな声で答えた。

「もっと、大きくはっきりした声で返事をしてくれないと聞こえないなあ」

男性客がわざとらしく溜息をついた。

「俺のチンポです」

猛は羞恥に震えながら最初より大きな声で返事をする。

「事実は正確に伝えないと駄目だよ」

「俺の勃起チンポです」

「もっと大きな声ではっきりと！」

「俺の勃起チンポです！」

猛は羞恥心に苛まれながら大きな声で返答した。

「おやおや、猛くんはチンポを勃起させながらおもてなしをするのかい？」

男性客がわざとらしく大袈裟な身振りで周囲を見回した。

猛は男性客の仕草に釣られるように周囲を見回した。

観光客や地元住民たちの好奇と侮蔑の眼差しが猛に突き刺さる。

観光客や地元住民たちが猛を、いや、猛のフル勃起もっこりを見ながらひそひそと話している。

その様子に猛は恥辱で震えることしかできない。

「チンポを勃起させることが、猛くんのおもてなしなのかい？」

「違います」

男性客の問いかけに猛は首を振った。

「こんな立派なチンポをぶら下げていますって自慢するのが猛くんのおもてなしなのかい？」

「違います……」

男性客のねちねちとした詰問に猛は身体を縮こまらせることしかできない。

倒錯的な光景であった。

猛は堂々としていれば、赤禪一丁でもその肉体美とイケメンぶりを陰らせることのない極上の男だ。

その極上の男が見ただけなら極上のもっこりをアピールしながら身体を縮こまらせて平凡な男の詰問に恐縮しているのだ。

男のヒエラルキーが逆転したかのような光景だ。

「それじゃあ、猛くんはチンポが勃起して困っているのかい？」

「はい……」

男性客の詰問に猛は身体を縮こませながら返事をした。

「それなら、この薬を飲まないといけないな」

男性客が懐からビンを取り出し、ビンに入った錠剤を三錠、猛に差し出した。

「さあ、飲みなさい」

「この薬は……」

「君に必要な薬だよ」

男性客が笑顔のまま猛に圧力をかける。

「猛くんは今、チンポが勃起していて困っているんだろう？

騙されたと思ってこの薬を飲む必要があるんだよ。

でないと、俺はSNSに投稿しないとイケなくなるからね」

男性客が邪悪な笑みを浮かべた。

「ふんどし人力車夫の高坂猛のおもてなしは、ペットボトルチンポをギンギンに勃起させることです、ってね」

男性客の言葉に猛は息を飲み込んだ。

そんなことをされては困る。

とても困る。

ふんどし人力車夫がいかかわしい性風俗のようなものと誤解されるような投稿は、猛の雇い主である黒柳に迷惑がかかる。

黒柳に迷惑がかかるということは、猛を黒柳に紹介したOBの面子が潰れることでもある。

そして、チンポを勃起させるおもてなしをしているなどと風評を流されることは猛の常識と羞恥心にとって大きな打撃となる。

「分かったなら、飲みなさい」

「……分かりました」

猛は男性客から錠剤を三錠受け取ると、飲み込んだ。

腹の底からかあっと熱くなってくる。

「さあ、大通りを通って駅まで連れて行ってくれるね。

ああ、くれぐれもゆっくりと頼むよ」

「分かりました」

猛は男性客の要求に従うしかなかった。

そして、ゆっくりと一步一步、赤禪の勃起もっこりを揺らしながら進み始めた。

「はあ……ああっ……くああう……」

猛は喘ぎ声を出しながら人力車を進ませていた。

喘ぎ声を出すことを恥ずかしいと感じる心は残っていたが、喘ぎ声を抑えるだけの克己心は残っていなかった。

猛の全身には汗が流れ、猛の西洋彫刻のような健康美に淫猥な艶を添えている。

それだけではない。

猛の赤禪の勃起もっこりの頂点には大きな染みができている。

鈴口から我慢汁が溢れだしているのだ。

猛のペットボトル早漏チンポは濡れやすい性質をしている。

我慢汁がぬとぬとと溢れだしているのだ。

我慢汁に濡れた赤禪は猛の亀頭の形に張り付き、猛のペットボトル早漏チンポのシルエットを見る者に感じさせている。

猛の腰の奥では暴力的な衝動が渦を巻いていた。

野生の本能がその開放を求めて吠え猛っていた。

だが、猛にとって幸いなことに、その開放がなされることはない。

猛のペットボトル早漏チンポには、射精防止リングが嵌められている。

射精防止リングがある限り、猛がどれだけペットボトル早漏チンポを扱いても、射精できないのだ。

けれど、その事実は猛の射精欲求を鎮めるものではない。

猛は射精できないもどかしさに震えながら人力車を進ませるしかないのだ。

「はうっ……はうあ……」

猛が浅ましい喘ぎ声を出しながら人力車を進ませる。

猛が一步足を進めるたび、我慢汁に濡れた猛の赤禪がずれる。

平常時ならば、いや、男性客に薬を盛られる前の猛ならば赤禪のずれも収まりが悪い程度のことで済んだだろう。

だが、今の猛は男性客に盛られた薬のせいで、発情している。

我慢汁で濡れた赤禪がちょっとずれるだけで、亀頭を捏ね回されるのに等しい快樂が猛のチンポから全身に広がるのだ。

もともと極度の早漏である猛にとって、過敏な亀頭への刺激は毒でしかない。

そんなことをされては、感じてしまうし、喘いでしまうのだ。

それでも猛は、ふんどし人力車夫としての責任を放棄しようとは思わなかった。

人力車に乗せた男性客を目的地である駅まで送り届けなくては、と必死に歩みを進める。

その一步一步が赤禪のずれを生み、そのずれによって過敏な亀頭が擦られ、快樂に責められるとしても、猛は進み続けるしかないのだ。

だが、その在り様は、傍目には変態的行為にしか見えない。

猛がどれだけの悲壮な決意をもって歩みを進めていようとも、そんな内情を知らない通行人からすれば、猛は赤禪を勃起もっこりさせ、しかも赤禪を我慢汁で濡らしながら喘いでいる変質者だ。

既にSNSには「変態車夫発見」などというタグとともに、赤禪をもっこりさせ、喘ぎながら進んでいる猛の写真や動画がアップロードされている。

猛はそんなこととは知らず、男性客を送り届けるために進み続けている。

ああ……チンポお……チンポが熱い……

赤禪が擦れてヤバい……

前に進むたびに赤禪が擦れていきそう……

腹の底でザーメンが渦巻いている……

ああ……イきたい……イきたい……

チンポ扱いてザーメンぶっ放したい……

駄目だあ……ザーメンのことを考えたら駄目だあ……
早く送り届けないとお……
OBに任された仕事だから……きちんとお……
ああん……チンポがしんどいい……
チンポしごきたいいい……
腹の底で煮え滾ったザーメンをぶっ放したいいい……
駄目だあ……ふんどし人力車夫の仕事をお……こなさないとお……
ああん……チンポがしんどいい……
チンポが膨れ上がってザーメンぶっ放したいいい……
扱きたいいい……チンポ扱きたいいい……
だめえ……だめえ……
ふんどし人力車夫の務めをお……こなさないとお……
ああ……はああん……チンポ扱かせてえ……

猛は一步步むたびに快楽に全身を震わせる。

勃起もっこのり赤禪は完全に我慢汁で濡れて猛のペットボトル早漏チンポのシルエットを淫らに暗示させている。

溢れ出た我慢汁は猛の全身を流れる汗と混じって太ももからふくらはぎに向かって伝っている。

猛の足を動かしているのは、体育会系気質、すなわち、OBの顔に泥を塗ってはいけないという鉄の掟だけであった。

その鉄の掟が快楽に沈む猛を引きずり上げ、強引に歩を進めさせるのだ。

猛に薬を盛ってこの窮状に追い込んだ張本人である男性客は猛の後ろ姿や喘ぎ声をスマートフォンで撮影している。

猛の尻肉がビクンビクンと震えるさまを撮影しながら男性客は邪悪な笑みを浮かべている。

道行く通行人や観光客たちは猛に侮蔑と好奇の眼差しを向けている。

猛はそんなことを意識する余裕もない。

ただただ、OBに恥をかかせないために男性客を駅まで送り届けようとしているのだ。

猛は我慢汁に濡れた赤禪によって過敏な亀頭を責められながら歩を進める。

常人ならば十五分もあれば歩ける距離を、猛は身体を快楽に震わせながら三十分近くかけて歩く。

猛の顔は出口のない快楽に責められてぐちょぐちょになっていた。

猛の頭の中は射精とふんどし人力車夫の務めとで渦を巻いている。

猛にとって地獄に等しい時間が過ぎ、ようやく人力車は駅の前に到着した。

「と……とうちゃくう……しましたあ……」

猛は淫らに蕩け切った声で男性客に告げる。

男性客はにやりと笑うと、我慢汁に濡れて卑猥な山脈と化した猛の赤禪の勃起もっこのりを靴のつま先で突いた。

「あひいいん！」

限界の底を破ってもなお快樂に責められ続けた猛にとって、その刺激は最悪の一撃であった。

猛は二歩、三歩と後ろによろめく。

そして尻もちをついた。

ぶしゃあああああああああ！

「あひいいいいいいいん！」

猛の赤禪の勃起もっこりから透明な液体が噴き上がった。

過敏な亀頭を赤禪で擦られ続けた猛のペットボトル早漏チンポが潮を噴いたのだ。

噴水のように潮を噴き上げながら猛は全身を震わせる。

OBの面子とかふんどし人力車夫の務めとか、羞恥心とか、猛にとって大事なものが潮と一緒に遠くへ行ってしまう。

猛は全身を震わせ、顔を快樂に蕩けさせながら潮噴きの快樂を享受し続けることしかできなかった。

奥付

『淫穴主将のスケベアルバイト』より「ふんどし人力車夫編」

初出：2023年2月4日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【pixiv FANBOX】

<https://may-gold.fanbox.cc/>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep